



北崎展江句集

く
り
か
ら

夏帯の紫紺の似合ひ球子展

片岡球子展である。

その中に、一人の女性が和服を着て観に来てゐるのであらう。球子の絵と云へば「富士山」や「面構」等印象的だ。一句はその大胆な絵と、相呼応して、なによりも艶がある。夏帯のひとは作者でもよい。

高橋 鷹史

北崎展江句集

く
り
か
ら



竹 僊 房

題 字 北崎展江

装 幀 北崎ひろや

表紙カバー（作者の着た羽織の意匠を使用）

平成十六年～十九年

83
句

ふるさと
は茶筥の里
や桃の花

紅梅の奈良
に古墨を
選び買ふ

吉田玉男氏

米 寿 なる 人 形 遣 ひ 春 灯

初 音 して その 日 や 甥 に 嬰 生 る

ひ
る
が
へ
り
羽
村
の
堰
の
初
つ
ば
め

堰
音
の
多
摩
の
流
れ
や
初
ざ
く
ら

大絵馬の狐の白し木の芽山

扁額に無量寿とあり紅枝垂

灌
仏
会
ど
ろ
ぼ
う
橋
を
渡
り
来
て

春
の
鴨
江
戸
城
址
と
碑
に
小
さ
く
あ
り

民家園炉をけぶらして雛祭

ひとりゐて心ほぐるる山桜

風
光
る
小
学
校
の
尊
徳
像

手
向
け
あ
る
椿
一
輪
波
郷
の
墓

楊貴妃の像や黄砂の街を来て

あやめ咲く巫女に回廊ながきかな

笙の音や松みどり立つ宝物殿

翡翠の翔ちて残りし杭ひとつ

夏帯の紫紺の似合ひ球子展

鞘堂の屋根なる梅雨の無精草

二人でて一人湯にをり夕河鹿

鶉飼待つ間も暮れきたる金華山

闇ふかく鶺鴒を呼ぶこゑの鶺鴒かな

宿下駄の鼻緒のゆるし月見草

夏萩にすこし風あり子規旧居

横たはる嗣治の裸婦夕薄暑

渚
ゆく
裸足の
あとの
続きを
り

芙
美子
忌の
沖を
見て
をり
白日
傘

薄ぐもり墓鳴く八雲旧居かな

麦秋の雲浮びみる伯耆富士

燕
来
て
暖
簾
替
へ
を
り
銘
木
店

慈
悲
心
鳥
朝
の
コ
ー
ヒ
ー
夫
と
飲
む

周平を読みをり夏の夜の雨

金魚坂てふ金魚屋のカフェテラス

屋根ごとに魔除けの獅子や夏の海

牛の貌揺れ来る露地の仏桑華

沖繩に牛車あばれし暑さかな

泡盛や沖繩びとと夜を更かす

児
ら
待
た
せ
綿
飴
菓
子
屋
汗
を
拭
く

縁
日
の
金
魚
す
く
ふ
子
膝
並
べ

爪あかく染めて人に逢ふ終戦日

トンネルを出るに生駒の真葛原

山
里
の
水
の
う
ま
さ
よ
盆
の
家

蝸
が
鳴
い
て
ゐ
る
ね
と
臥
す
母
よ

風信帖ひろげて灯火親しみぬ

ともどもに食後の薬餌小鳥来る

供へある菊に餡パン子規の墓

舟朽ちてをり古利根の秋あかね

飛び地なる利根の小堀の水の秋

小堀——土地の名

古利根の流れとどまり秋ふかむ

夫ほめてわれの漬けたる秋茄子

うなぎ・島田家

残暑なほ暖簾たたむを惜しむかな

日照雨なか秋の祭の祝詞かな

月あげて雅楽鳴りいづ采女祭

猿さる沢さ池はの映せる月や采女祭

仲秋や池に扇を投げて舞ふ

皇子眠る万葉の山花すすき

草の実や雀遊べる宇陀郡

おもはずも鳴りてをかしき瓢の笛

蒲生野の日照雨の中の葉掘

若狭みち朽木谷てふ芋水車

唐崎の松に来てをり今朝の秋

疎開の地阿波おもひだす阿波踊

古き世の古きピアノや小鳥来る

鬼子母神木菟となるすすきかな

おのおのに灯火親しむ二人かな

蟬塚のここにも咲ける曼珠沙華

稲すずめ鳥海山の麓村

ゆく秋の杉の木立の羽黒山

穴惑ひ羽黒の山の木漏れ日に

けさ富士の初冠雪や夫を呼ぶ

坂田藤十郎丈

襲名のまねきの上がる京の冬

筆はじめ迷ふことなく無の一字

福耳の机上の母へ御慶かな

墨の香の部屋に籠れる二日かな

寒鯉を覗いて見えし己が顔

寒紅や不惑の齡も疾うに過ぎ

綿虫にかかはり夫に遅れをり

さ
む
ざ
む
と
水
墨
屏
風
絵
図
の
寺

枕
辺
に
虚
子
歳
時
記
や
去
年
今
年

俊寛に泣かされみたる初芝居

放鷹の鷹とぶ松の浜離宮

放鷹の鈴の音にある淑気かな

平成二十年

62
句

草萌に春日の巫女の出てをりぬ

飛火野にそそぐ雨脚草萌える

青丹よし奈良に摘みゐて鶯菜

法華寺の囀りのなか大茶会

大宇陀のしだれしだるる老桜

又ひとつ春の雲ゆく法隆寺

ひらひらと蝶連れだちて浄瑠璃寺

義太夫の額に汗して夜半の春

春惜しむ心中ものの芝居見て

目刺焼く烟とげぬき地藏尊

芭蕉の道① 五句

行く春を惜しみ草加の松並木

たんぽぽの絮とぶ草加芭蕉像

野木神社

梟の巣籠り仰ぐ禰宜とをり

大注連の杉の二荒の青嵐

雉子啼く畑の中の芭蕉句碑

亀鳴くや水琴窟を覗く児に

閻魔さま覗く目に目や遠足兎

龍の図の点晴の目や春動く

尾の出でし後の修羅場や蝌蚪の国

春雷に幹ののけぞる大蛇松

大いなる利根の流れや揚雲雀

刀禰川と書きある利根の青き踏む

歌垣□古河の山見ゆと佇ち桃がすみ

竈へつつひの□使はずにあり桃の花

芭蕉の道② 六句

時
か
け
て
鰻
食
ひ
を
り
芦
野
宿

植
田
吹
く
風
の
柳
に
お
よ
び
を
り

解 禁 の 鮎 の 那 珂 川 朝 ぐ も り

寄 進 者 に 遊 女 の 名 あ り 額 の 花

草矢射て子ら遊びをり関の跡

須賀川や芭蕉の道の灸花

捨てられて
廃屋にあり
竹夫人

百日紅もう
父母をらぬ
家となり

明日香なる馬子の墓に秋の風

東大寺白雨たばしる鴟尾二つ

あすか路に鐘の鳴りみる稲架日和

稲架解きて現れし野面や飛鳥寺

稲妻のはしる生駒嶺父母を恋ふ

竹の春なかなる茶筥作りかな

蛸壺に菊咲く須磨の泊りかな

コスモスに漢やさしき飯場かな

一滴に墨を擦りをり鉦叩

願ひみな素直な子等の星祭

踏み込みし子等の足あと貝割菜

上州と信濃を分くるすすき原

堀辰雄記念館

若かりし辰雄の写真小鳥来る

信濃路の畦の案山子の夫婦とも

槍・穂高見えて頬張る
枳の餅

指ひらききつて手を挙ぐ
星月夜

馬子唄の追分にをり盆の月

枅に飲む木曾の新酒の七笑

利酒の渦ある猪口に酔ひにけり

木曾路より恵那に来てをり栗の飯

芋
茎
干
す
里
山
美
濃
に
入
り
来
た
る

酔
芙
蓉
遣
ら
ず
の
雨
の
降
り
だ
し
ぬ

子等遊ぶ駄菓子屋のあり一葉忌

むらさきに冬富士暮るる球子の死

富士晴れと言ふ日賜り布団干す

故郷にみな着ぶくれて忌を修す

襟巻をぐるぐる巻きに古書店主

白鳥の来し日ざっくり白菜割る

世を捨てし僧の恋歌かるた取

飴いろの母の世の櫛初鏡

平成二十一年

91
句

伊豆の海見ゆる座敷や雛祭

聖堂の巖つき菘鳥交る

蝌蚪に尾のでて泳ぎぬる御饌田かな

ふらここに双子の同じ赤い靴

あ
が
り
ゆ
く
風
船
銀
座
四
丁
目

お
ぼ
ろ
夜
の
噴
水
た
か
き
逢
瀬
あ
り

釈迦と日を誕生同じ古稀の兄

鯉の尾の跳ねる力や花ぐもり

荒草に見つけし花や熊谷草

道しるべ是より木曾の山笑ふ

山靴に花びら付けて木曾に入る

連翹の雨ふる木曾路歩きをり

初宮の嬰のねむれる樟若葉

芭蕉の道③ 五句
笈も太刀もさつきにかざれ紙のほり 芭蕉

われらまた五月に来たり翁句碑

住職のいはき訛や白牡丹

真昼間をひとひらくづる白牡丹

飯坂に目覚めて宿の山桜

さみだれや尊顔若き芭蕉像

近鉄・八重の里

降り立ちて駅の名もよき菜の花忌

園児らに香具山のあり草の餅

け
ふ
よ
り
は
遺
影
の
嫂
や
桐
の
花

灯
と
も
し
て
嫂
は
仏
に
青
葉
木
菟

葬りにうぐひすの鳴く大和かな

佐千代・里佳

母の日の今年母亡き娘のふたり

手のひらに豆腐切りをり夕薄暑

葛ざくらはやくも嫂の七七忌

あ
か
あ
か
や
金
魚
の
大
和
郡
山

昼
少
し
俄
雨
あ
り
鬼
灯
市

子ら群れてゐる夏至の日の閻魔様

二人ゐて額の花剪る修道女

江の電の腰越を行く夏の月

立ちしまま目をつむりをり羽抜鶏

父の文まざと喰ひをり雲^{きら}母^ら虫

紙魚喰ひの海軍父の便りかな

花咲いてなんぢやもんぢやに父の声

膝がしら並べて縁に遠花火

エンジンを止めて棹さす蓮見船

橋の名もよき駒形に泥鰌鍋

泥鱸屋に貫ひし団扇すぐ使ふ

神妙に蟻列をなし来迎会

蝉しぐれ散華さんげの面かぶり

奈良にをり高円山の魂送り

嫂亡くて兄の見てをり盆の月

芭蕉の道④ 四十一句

塩釜の社灯され夏の雨

西
行
の
戻
し
の
松
や
蛙
鳴
く

巡
礼
と
宿
り
て
朝
の
茗
荷
汁

来合はせてあやめ祭の毛越寺

封人の家の夏炉や芭蕉の座

大鍋を寺より運ぶ芋煮会

山刀伐の翁の径の破れ傘

碑の書また楸邨とあり紅の花

山寺の高きにありて風薫る

待てば啼く仏法僧の坊泊まり

鮎釣の腰を流るる最上川

船すだれ上げて下るや最上川

陸にして九十九島や稲穂波

新松子目に増やしをり蚶満寺

胸に来し蝗や出羽の国に入る

出羽の田の大案山子目を剥きてをり

捨て案山子姉さ被りをまだ解かず

重
陽
の
羽
黒
の
山
の
力
餅

月
の
あ
り
野
分
の
あ
と
の
湯
殿
山

海を見て目を休めをり曼珠沙華

色変へぬ松の地を這ふ鼠が関

秋の虹屏風祭の町の中

町家なる屏風の絵にも我亦紅

越に來て一人湯にをり星月夜

初雪にしてしんしんと夜も降る

霰
降
る
弥
彦
の
神
の
大
鳥
居

ふ
る
雪
に
声
さ
ん
ざ
め
く
寺
泊

浜焼や浜の子供もしぐれをり

妻入の家並しぐるる出雲崎

良寛の剃髪の寺みそさざい

浜千鳥母の佐渡見て良寛像

鳶の輪の海へはみだす枯岬

親鸞のゆかりの庵の干大根

波
寒し
屏風
巖なす
親不知

波
間より
虹立つ
冬の
親不知

市振やをみなもしたる頬被

市振に萩枯れふるき一里塚

俱利伽羅は落葉しつくし空の青

俱利伽羅は夫のふるさと手毬唄

笹子ゐる谷の源平供養塔

雪吊にまだ雪の来ぬ加賀の国

名の通り霊峰富士や初日さす

松過ぎてなほ華やかや明石鯛

初市の雪に投げ出す鯉一尾

糶終へて河岸の台車に春の雪

獅子舞に頭噛まする年男

人日の母の名のある鯨尺

紅絹をもて椀拭いてをり女正月

平成二十二年

66
句

鳥雲に父母住みし家壊さるる

芭蕉の道⑤ 十二句

白梅や一笑追善芭蕉の碑

長居して安宅の関の春没日

実盛を松に偲べり春の潮

那谷寺は苔の寺なり落椿

くしゃみして僧現るる杉木立

僧
ひ
と
り
み
て
残
雪
の
永
平
寺

旅
な
か
ば
木
の
芽
峠
に
飛
燕
草

咲いてをり雪間ゆきまの座禅草

番屋にも神棚を吊り鱈漁

色の浜

集落に産小屋のあり菜種梅雨

畑の麦青し姉川戦あと

青
蛙
跳
ん
で
や
畦
の
芭
蕉
の
碑

天
折

か
げ
ろ
へ
る
わ
れ
の
知
ら
ざ
る
姉
の
墓

長命の父の忌はまた啄木忌

麗らかや虚子のゐそうな理髪店

きらきらと海きらきらと虚子忌なり

竹青き蓋の井戸あり百千鳥

紅梅や否白梅の心意気

兄妹に卓袱台まるし蜆汁

をみなごのわれも溢らし菖蒲の湯

鹿島なる夏越の雨となりにけり

竿使ひ舟来たりけり行々子

山鳩のけだるく鳴けり昼寝覚

淀君の自刃の碑なり夏果つる

大阪やばたばた鰻焼く煙

射干やふるさと奈良に塔多し

よろけつつ
春かす日がの鹿の子生まれけり

針に糸通してしばし良夜かな

十六夜のこほろぎを掃く畳かな

悼
森澄雄先生

かなかなや句集四遠を開きては

木の柿をもぎきて大和ほとけ道

秋あつし長き土塀の法隆寺

角伐りの放たれし鹿びいーと啼く

角伐られたる鹿月を浴びみたり

ひややかに膏藥を貼るふくらはぎ

山
雨
来
て
い
よ
い
よ
赤
し
烏
瓜

空
青
し
無
患
子
の
実
の
深
大
寺

あ
か
あ
か
と
飯
桐
の
実
の
古
刹
か
な

犬
吠
ゆる
家
の
石
榴
の
割
れ
は
じ
む

三陸の海の色かな
秋刀魚の目

寝返りて源氏読む夫
夜長かな

をとこへし戦地の文を残しをり

この淵の真鯉ばかりに葛の花

はつかなる風の紫苑や観世音

下北・津軽 十二句

冬草を拾ひつつ食む寒立馬

風花をつけてまばたく寒立馬

下北のなほその北の枯すすき

終着駅そこより枯野続きをり

烏賊を干す婆にとんびに冬日和

懐
手
に
潮
の
目
を
読
む
漁
師
か
な

着
ぶ
く
れ
て
鮪
船
待
つ
大
間
か
な

顔をみなシヨールに包み恐山

日短かの日を返り見る恐山

湯のことをゆっこと言ひて雪の宿

赤い羽根付けてくれしよ津軽の子

太宰の地津輕林檎を頬ばりぬ

しぐるるや投込寺の遊女塚

遊女塚だれも無口にしぐれをり

助六の大羽子板を裏がへす

息深くして切る餅の白さかな

割烹着の日々陽の細り花八つ手

毛糸編むわれに本読む夫のあり

木の巣箱向きむきに雪降りをりぬ

喪籠りに日の差しみたり
藪柑子

母の忌のこの上もなき
冬の月

平成二十三年

68
句

弘法寺

葛飾にきて春寒し花の句碑

名残り雪真間の手児奈の井蓋にも

針供養なかにひとりの男弟子

おもはずのぎつくり腰や万愚節

知恵熱と擲揄されて臥す万愚節

男の子にも八重歯のありし桃の花

雛飾る遺影の母のもう百歳

母の世の長持のある雛の間

初蝶や蛇口を上に向けて飲む

嘔りや生駒を過ぎて平^へ群^{ぐり}なる

吉水神社

南朝の玉座をいまに花冷えす

如意輪寺

京を向く後醍醐陵の花吹雪

てのひらに吉野の余花の陀羅尼助

高橋鷹史氏

目を病むと君にまぶしき蝶の昼

七輪をもて東京に目刺焼く

東日本大震災 二句

海猫どもも啼いて三陸仏生会

被災の地けふ降りつもる涅槃雪

ほんたうは船場の生れ
花_{はな}
櫻_{ゆず}
桃_ら

土^と
耳^る
古^こ
より
夫の
旅信
や
明易
し

初
夏
の
港
の
町
の
風
見
鶏

歳時記の夏をひらきて傘雨の忌

山門に揚羽はばたき天女の囀

翡翠の滴る色に飛びにけり

多摩御陵北山杉の夏木立

御陵へと薫風の道辿りけり

目まとひを払ふ昭和を払ふごと

柿の花こぼるる門や武相荘

皮を脱ぐ竹や両手に抹茶碗

羽拔鶏わかき夫婦に飼はれをり

鎌倉の尾根に道ありほととぎす

こゑごゑの子等に夏来る源氏山

建長寺

泰山木咲いて五山の一の寺

訣れ来て衣たたみをり遠花火

晩学の鉛筆けづる太宰の忌

波消しに来てはくだくる土用波

うすものの落語家のゆく六区かな

うなぎ屋に木遣の衆も暑氣払

蓋開けてマンホールあり炎天下

仏壇に西瓜まるごと供へあり

目つむりて瞼の白き羽抜鶏

桔梗や端座の父をふと思ふ

十月の真顔ばかりや蟹を食ふ

新米の稲穂もつけて越より来

奥多摩のごろ太石吹く秋の風

本郷の角の「かねやす」鴨渡る

悼 中村芝翫丈、遠縁ならば

舞ひ終へてまた舞ひをらむ秋の風

ふるさとの大和をあるき烏瓜

子規詠みし鐘いまも鳴る柿の秋

子の帽子何入れをらむ蝗かな

墨すつて墨の香のある子規忌かな

井之頭公園

家康のゆかりの水場三十三才

長兄 叡

上京の兄の元気な冬帽子

次兄 宏章

初霜や父似の兄の長寿眉

わが窓に富士けふも見え春隣

一病を抱ふる夫のちゃんちゃんこ

神馬舎に神馬見てをり千歳飴

帯留に叔母おもふ日や笹子鳴く

大店の暖簾分け入り近松忌

鳶とんで空の広しよ親鸞忌

うかつにも討入の日を流行風邪

民宿のめっぼう熱き柚子湯かな

電飾の聖夜の街に疲れけり

寝いねがての眠り葉を霜夜欲る

琴の音の東照宮に冬牡丹

三峰神社

祭神は狼なりし雪降り積む

真つ新の的へ真つすぐ弓始

葉牡丹に遊ぶ甥の娘こ三み人たりかな

年の豆煎りてをるなり炮烙鍋

平成二十四年

1
句

紅梅に古稀の齡をつつしみぬ

あとがき

句集名『くりから』は源平合戦の地で知られ、芭蕉翁もこの俱利伽羅峠を越えて、加賀の国に入ったようです。俱利伽羅は俱利伽羅不動の略ですが、夫の故郷の地名でもあります。夫への感謝の意味を含めて句集名としました。今年古稀を迎えるにあたり、句集を編んで見ることにしました。また、四年ほど前から「奥の細道を訪ねて」と言う旅行社のツアーに参加し、深川から最終の地大垣まで無事終えることが出来たことにもよります。そのとき出会った人々や自然を、まだ記憶の新しいうちにまとめてみたいと思いました。私

が育ったのは奈良の生駒です。ここにはもう父母はいませんが、懐かしさもあり時々訪ねて詠んでみました。この句集を奈良の友人にも読んで頂きたいし、亡き父母にも捧げたいと思います。上梓にあたっては高橋鷹史氏、佐藤喜孝氏、吉田勝氏には大変お世話になり、終始行き届いたご配慮を賜りました。ここに深く感謝申し上げますと思います。

平成二十四年九月吉日

北崎展江

著者略歴

北崎 展江（きたざき のぶえ）

1942年 大阪に生まれる 奈良・生駒に育つ

2004年 森澄雄 主宰俳誌『杉投句投句』

2010年 『杉』 同人

現住所 〒 176-0021

東京都練馬区貫井2丁目 20-10-407



句集
くりから



発行日

平成二十四年十月一日

著者

北崎展江

発行所

東京都中野区中央二・五〇・三
☎〇三・三三三・四六二三
竹僊房

印刷

東京都板橋区東坂下二・九・六
(株)三美印刷

製本

東京都北区神谷三・五六・七
あおい工房